

議案第 50 号

宝塚市教育委員会委員の任命につき同意を求めることについて

資料 1 任命しようとする者の活動内容や考え方、この者を任命しようとする理由等

1. 任命しようとする者の主な活動内容や実績、考え方について、本人から提出された資料をもとに、主な部分をまとめた内容は以下のとおりです。

(1) 『大阪子連れパワーアップ情報』編集・出版 初代編集長

1992年、子育てを楽しみ子どもを尊重するために、親が自分らしい人生を送ることが大切であると考え、子ども連れで働く、学ぶ、ネットワークを作るための情報誌を初代編集長として発行。当時は、子ども連れをターゲットにした情報誌がなく、話題を集めた。その後、大手出版社からの出版が相次ぎ、公共施設やショッピングセンターのトイレのオムツ替え用のベビーベッドやベビーキープ、授乳室、保育室の設置や、保育付きの講座やイベントなども加速度的に増加した。この活動経験から、実際に行動することで、自分自身だけでなく社会が変わることを実感した。

(2) 保育ルームアリーテ 代表 (株式会社アリーテ)

1994年には、情報だけでは踏み出せない女性のために、子育て中の女性3人で、一時保育事業を立ち上げ、伊丹市に保育ルームを開設、1997年には兵庫県新産業キャピタル制度の投資支援を得て法人化し、1999年に宝塚ルームを開設した。一時保育は単なる一時預かりでなく、子どもにとって新しい体験の場、子ども同士が育ちあう場であることを基本理念に研究を重ねた。その後、行政だけでなく、企業、NPOなどが一時保育に参入するなど、社会の大きな動きがみられるようになった。この活動経験から、一時保育を利用することで、人が変わり、小さなコミュニティが少しずつ変わることの実感とよろこびを得た。女性の起業やコミュニティビジネスの事例として注目され、地域にノウハウやアドバイスを提供し、市民事業やコミュニティビジネスの立ち上げにも寄与した。

(3) 株式会社ロック・フィールド勤務

2004年には、株式会社ロック・フィールドで、販売促進やウェブの担当をしながら、企業内保育施設を立ち上げ、食育に関する基本的な考え方の取りまとめを担当した。女性社員のための施設ではないこと、仕事と家庭の両立を目指すのは決して母親だけではないことを、特に管理職の男性にむけて発信し、社内の意識変革にも大きな影響を与えた。また、「食育」というと、とりわけ家庭が重視されがちだが、食の多様性を学ぶ、体験するという点では、むしろ学校や地域コミュニティ、マスメディアなど、家庭外の場からの情報発信や学習機会の提供が必要であると感じた。

(4) 川柳人 (2011年～ 神戸新聞川柳壇選者、神戸新聞カルチャー講師。2018年 句集「hibi」出版)

川柳は言葉で表現する文芸で、いかに表現するか技巧も大事だが、表現の前に何かを感じとることがより重要である。川柳を通して、自分を客観視するもう一人の私の視点、ものごとをあらゆる角度から見る視点を得たことは、創作のみならず、多角的な思考・判断にもつながってきている。

(5) 伊丹市公平委員

2002年から3期12年間、伊丹市公平委員を務めた。毎月の定例会で事例研究を行い、不利益処分の審査・請求事例について、判例、社会情勢なども鑑みて、処分の妥当性について意見交換を重ねた。マスコミで取り上げられるなどして、いかに社会批判の高まっているケースであっても、中立の立場で冷静に事実を精査し判断することの大切さを学んだ。また、公平委員会の業務ではないが、問題のあった職員へ懲戒処分を科すだけでなく、防止と更生の観点から、カウンセリングや更生プログラムの必要性も感じた。

2. 教育委員会が抱える課題にどのように取り組んでいくのかについて、本人のコメントは以下のとおりです。

自身の活動、保育の仕事を通して、人が変われば地域が変わり、それは未来が変わることだと確信しました。子どもの教育は、子どもが変わる可能性に満ちていて、子どもが変わることが地域を変え、未来を変えることにつながるということを、まず、事務局や教職員の皆さんと共有したいです。

私のこれまでの草の根の活動や仕事、また、もう成人しましたが2人の子どもの子育て経験を、宝塚市の教育課題に生かせればと思います。

まだ課題の把握もできていない段階で、何ができるのか具体的なことは申し上げられませんが、現在の私は川柳という短い詩を書いております。たとえば、川柳では、従来より「共感（シンパシー）」できる作品が評価されてきましたが、現在はどちらかというと「驚き（ワンダー）」をもたらす作品が高く評価される傾向にあります。「同じ」であることの安心から、「違う」ことのおもしろさへの変化は、同じ短詩系の短歌や俳句においても同様の傾向を感じており、時代の変化でもあると思います。

違いを認める、おもしろがることは、多様性を認め合うことの基本で、感性が豊かになればなるほど、自分とは異なる他人の感性も認められるようになります。そうした感性開発への新たなアプローチなど、教育とリンクすることは多分にあると感じます。

3. この者を任命しようとする理由

今回任命しようとする者は、情報誌の発行や保育の仕事、企業での実績、各種行政関係の委員の活動、自身の子育ての経験から、地域に暮らす一人ひとりの生き方、考え方を尊重し多様性を認めあうことの大切さを実感し、実践してこられた。伊丹市公平委員12年間の経験からは、中立の立場で冷静に事実を精査し判断することの大切さを認識されている。自身の意見を明確に積極的に発言する方であり、教育委員会の審議の活性化にも力を発揮されることが期待できる。

また、現在、教育委員構成の男女比は、女性2人・男性3人で、このうち女性1人が任期満了となることから、後任は女性の委員を任命することが望ましい。

市教育委員会は、「いじめ問題再発防止に関する基本方針」における検証を行うため、教育委員会、検証委員が一緒になって学校の取組を励ましていくという視点から、現場の教職員にヒアリングをするなど、教育委員自ら現場の声に耳を傾け、より良い方向に導いていこうと考えている。子ども、保護者、教職員のそれぞれの立場や考え方を理解し大切にしながら、着実に今後の検証作業やいじめ再発防止の取組を進めていくために、本人がこれまで培ってきた識見を生かしてもらいたい。